

足利尊氏

村上

村上元三
足利尊氏

学習研究社

書きおろし歴史小説シリーズ

定価 500円

足利尊氏

昭和四十四年一月十日 初版発行

著者 村上元三

編者 日本歴史教育研究会代表

内藤誉三郎

発行者 古岡秀人

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台四ノ四〇ノ五

郵便番号 一四五

電話 東京七二〇局二一一一

振替 東京一四二九三〇

印刷 共同印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社

目

次

弥藤太という男	7
高氏と直義	15
北条家滅亡	24
建武の中興	33
護良親王捕縛	42
逆臣の名	51
弥藤太の敵討	60
苦しい戦い	69
楠木正成の立場	79
湊川の戦い	89
吉野行宮	101
楠木正行討死	111
高家と上杉家の争い	123
動乱の都	132

武庫川の堤	141
夢窓国師の言葉	150
僧衣の下刃	159
直義の死	172
父と兄と弟	183
北畠親房の死	192
八幡大菩薩の旗	202
弥藤太の土産	211
海外への志	221
群盗	226
八幡船	235
尊氏の工作	239
尊氏の死	248
二代將軍義詮	258

三代將軍義滿……………267

四代將軍義持……………276

五代將軍義量……………281

六代將軍義教……………284

七代將軍義勝……………292

八代將軍義政……………298

九代將軍義尚……………308

十代將軍義植と十一代將軍義澄……………313

十二代將軍義晴……………321

十三代將軍義輝……………326

十四代將軍義榮……………335

十五代將軍義昭……………337

足
利
尊
氏

装画・挿絵 装幀
御正 桒折久美子
伸

弥藤太という男

どういふ身分の人たちが、この船に乗るのか、一向に弥藤太は教えられていない。しかし、大枚の錢になると聞いて、船をこの知夫里の島へ入れたのであった。

ここ二年ほど弥藤太は、伯耆国から隠岐島を経て、能登国まで商い船を通わせているし、このあたりの海上のことには詳しい。

もともと隠岐国は西ノ島、中ノ島、知夫里島の三つを合せて島前と呼び、いま一つの島後は島前よりもはるかにへだたっている。

弥藤太を伯耆国で傭い入れたのは、名和湊にいる又太郎長年という侍で、この隠岐島にいる隠岐前司佐々木清高と、なにか内々のうちに連絡があったらしい。

しかし、弥藤太のような男には、いまの世の中がどうなっているのか、それはどうでもよいことであ

った。

この元弘三年（西暦一三三三年）に入つて、鎌倉幕府にある北条高時は、ますます尊王派を圧迫し、諸国で戦いが起つてゐる。

三年前まで四国の讃岐国にあり、海賊の一派を率いていた弥藤太は、六波羅勢に襲われ、住居も船も焼かれ、妻子を討たれ、僅かな手下を連れて、ようやく瀬戸内の海へ逃れ出た。

北条勢に味方をしたところで、なんの得にもならず、といつて、都方のために働いて恩賞にあずかるうという気もなく、弥藤太はそれまで自由気儘に海の上で暮して来た男であつた。

父の弥藤丸は、日本ばかりではなく、唐の国へまで出かけて行つて商いをした人間であり、弥藤太も父と一緒に、なんべんも珍しい異国の土を踏んでいる。

もともと海賊というのは、海の上の盗賊という意味ではなく、水軍の意味であつた。

しかし、弥藤太は瀬戸内の河野家、あるいは村上家などに属することもなく、大きな船二艘で自由気儘に海上を航海し、商いをしたり、あるいは商い船

を守って代償を得る、という仕事を続けて来た。

ことし弥藤太は、二十四になる。

濃い髭が顔の下半分を覆っているので、年よりは老けて見えるが、人の二倍もの強い弓を引くし、打物取ってもおくれをとったことはない。

自分の船と一緒に焼かれてしまった家の中で、無惨に死んでいった妻や子供の顔が、いまでもときどき弥藤太の眼に浮ぶ。

あのときの六波羅勢の大將は、北条家の一族で長門探題北条時直といった。伊予国の土居勢と戦うため、まず瀬戸内の海賊を味方にし、それから北条時直は讃岐国へ侵入して来た。

弥藤太とその手下たちは、時直の下知に従わなかったので、不意に時直は六波羅勢を率いて、弥藤太の本拠にしている丹生島の莊へ乱入して来た。

その戦いで味方も船も失った弥藤太は、まず出雲国まで逃れ、山陰地方の武家方の中で重きを占めている塩谷高貞の知遇を得て、船を買入れ、今日まで無事に商いを続けて来たのであった。

「誰ぞ、西ノ島より舟を漕ぎ寄せて来る者があるぞ」

船の舳先に立っていた見張りの者が、低い声で言った。

閏二月二十四日のこの夜は、月もなく、僅かな星明りがあるだけで、海上には冷たい風が吹き渡り、波も高い。

知夫里の湊は、ちようど島の陰にあるが、西ノ島から漕ぎよせて来る舟は、弥藤太のような眼の利く者にはすぐに見分けがつく。

それは、二艘の小さな漁舟であった。

「あれだ」

この船を備い入れた名和一族の悪四郎泰長が、そつと弥藤太へ言った。

「はじめの約束通り、どのお人へ向つても声をかけることはならぬ。啞になったつもりでおれ」

「心得てござる」

と暗い中で、弥藤太は笑いを含んだ声で言った。

名和悪四郎泰長という侍が、正月からこの二月へかけて、二度ほど隠岐島を訪ね、島前の西ノ島にある別府へ忍んで行き、なにやら隠岐前司の佐々木家の侍とひそかに談合していたことは、弥藤太も知っている。名和悪四郎を二度とも、名和湊からこ

ここまで船で運んだのは、弥藤太自身だからであつた。

「めいめい、すぐに船出が出来るよう」

と弥藤太は、自分の連れて来た船子たちへ命じた。

西ノ島のほうから近づいて来た二艘の漁舟は、艚の音を立てぬよう気をつけながら、そとと弥藤太の船に横づけになった。

悪四郎泰長に言われていた通り、弥藤太をはじめ船子たちはいっせいに両手を仕え、船へ乗り移る人たちを見ないようにしていた。

だが、はつきりと弥藤太には見える。

まず船に乗り移つて来たのは、夜目にもそれとわかる都の公家風の装束をした二人の人物であつた。続いて、袈裟頭巾の赤円法師が、黒い直衣をまとつた人物を軽々と背に負い、船へ乗り移つて来た。そのほか、三人の都風の女性の被布で顔を隠しながら、ようやくのことで船へ乗り移つた。

一行合せて、十二人であつた。

「弥藤太」

人々を船の屋根の下へ案内してから、赤円法師が

船上へ戻つて来ると、そつと言つた。

「わしの口から語つた、と思うな。誰が言わずとも、おぬしも気がついたであろう。おそれ多くも、一天万上の君が、この船へ乗り給うたのだぞ」

「うむ」

うなずいたきり、さすがの弥藤太ほどの男も身体を固くした。

天皇（後醍醐）が去年の三月、鎌倉幕府の指図で、都よりはるかなこの隠岐島へ移され給うたことは、弥藤太も知っている。しかし、今夜この船に乗せるのが、尊い帝であるうとは、弥藤太も考えてはいなかつた。

隠岐島を守る佐々木清高が、島前西ノ島の黒木の御所から、やすやすと帝が逃れ給うのを見逃した、とは考えられない。おそらく塩谷高貞、名和長年などの使者が佐々木清高を説伏せ、今夜のことを計つたに違ひなかつた。

「風がよくば、船を出せ」

船上へ出て来た名和悪四郎泰長が、低い声で弥藤太へ命じた。

悪という異名は、強いという意味で、四郎泰長は

名和一族の中でも武勇拔群の侍であり、しかも弁舌に長けている。まだ四十前だが、名和一族の中でも信頼を集めている侍であった。

「赤円坊」

と四郎泰長は、赤円を呼び寄せる、

「おぬしの今日までの働き、並々ならぬものがあつた。いずれ手厚く恩賞にあずかるうぞ」

「おそれながら」

袈裟頭巾の中から、赤円は低く言つた。

「それがしは、恩賞を賜わろうとて、お味方を仕つたものではござらぬ。この末世に、寺も焼かれ、炎の中に尊き仏像の炎上し給うを見奉つて、身は人間でありながら「仏敵を滅ぼそうとて、生きながら鬼になつた身ゆゑでござる」

赤円は、近江の延暦寺の僧徒であつた。一山の中でも、学問に秀れ、ことに強力を以てうたわれていたが、去年の八月、六波羅勢のために延暦寺を焼かれてから、赤円は一所不住の身となつた。

弥藤太と知合になつたのも、出雲国塩谷の荘であり、二人はすぐに意気投合した。

三十を二つ三つ越しているが、源平合戦のころ勇

名をはせた武蔵坊弁慶の再来か、と思われるほど赤円は身体も大きく、そして情にもろい僧侶であつた。

「お客たちのご用意がよくば、すぐに船出をする」と弥藤太は、四郎泰長へ言つた。

「うむ、夜の明けぬうちに島を遠く離れねばならぬ。一応は追手の舟もかかるうが、案ずることはない」

四郎泰長がそう言つたのは、あらかじめ隠岐前司佐々木清高となにか打合せがしてあるからであるう。

すぐに弥藤太は、船子に碇をあげさせ、帆を張つた。

この船は三百石積ほどで、異国の海にも慣れた弥藤太がいろいろと工夫をこらし、どんな高波にもたえられるよう、頑丈に船は出来ている。しかも、帆と艀、双方を使えるようになっていた。

船は、まず艀の力で知夫里の湊から出ると、こんどは風の力を借り、一気に外海へ走り出た。

屋根の下から、そと一人の公家が船上へ出て来た。さっき、いちばん先にこの船へあがつて来た人

物であつた。

「赤円法師へ、御説である」

とその公家は、ほっとしたのであるう、いかにもうれしげな語調で、

「主上を軽々と背負い、あの闇の道をやすやすと走りくれたること、まるたちも心強う思うた。主上にも、ことのほかのおん喜びにて、やがて時至らば、都の近くにて一寺を与うべし、との仰せ出だされであつたぞ」

「忝のうは存じまするが」

赤円法師は、両手を仕えながら言つた。

「それがし、一山を与えられるよりは、仏敵北条高時の首、この手にてねじ切つてやるが望みにてござります」

「重ね重ね、力強き言葉かな」

笑いながらその公家は、屋根の下へおりて行つた。

僅かな灯火一つをさげた屋根の下で、なにやら面白そうに語り合う男女の声が聞えた。

「いずれ、おぬしにもわかるうが」

と、名和四郎泰長が弥藤太へ教えてくれた。

「只今のお公家は、主上に従い奉つて隠岐島へ流されたる左近衛少将千種忠顕卿ぞ。そのほかに左近衛中将一条行房卿、ほかに内侍阿野廉子どの、大納言局、小宰相局ぞ。無事に伯耆国へ着いたる上は、約束の通り恩賞を授けよう」

「有難う存じまする」

赤円法師とは違つて、褒美が目当てでこの仕事をした弥藤太は、はつきり答えた。

かねての手筈通り、弥藤太はこの船に乾魚を入れた俵を積んであるので、屋根の下の主上たちも、その臭いがうとましく思われるかも知れない。しかし、ちやうど追風がその臭いを暗い海上へ吹き払つてくれている。

隠岐島を離れてから弥藤太は、船子たちに艫を漕がせ、船脚を早くさせた。

ようやく夜明けになり、隠岐島の影もかすかになつたころ、島のほうから十艘ほどの小舟が、おそろしい勢で追つて来た。

「佐々木清高の軍勢、追うて来たと見ゆる」

烏帽子に狩衣という姿の名和悪四郎泰長は、太刀を腰に、じつとそのほうを睨みつけた。

「われらとの約束、守ればよいが」

「ご案じなされますな」

笑顔で、弥藤太は言った。

「あれほどの小さき舟ゆえ、乗り手は一艘ふねについて十人足らず。合せて六、七十人ほどの武者、この船を囲んだとて、一人もこれへはあげませぬ。さりながら、お約束でござるゆえ、それがし一人にて追いつ返しに見せ申そう。方々は、いずれも屋根の下に身をひそめ、しばらくは声も出し給わぬよう」

「心得た」

うなずいて四郎泰長は、屋根の下へ入って行った。

やがて十艘の小舟が、この船へ次第に近づいて来た。いずれも鎧よろいに身を固めた武者で、懸命になつて櫓こを押している。舷へらには楯たてを並べ、長刀ながなたの穂先が、ちょうど海上へ昇つてきた朝日にきらきらと光つた。

「その船、待てえ」

先頭の小舟から、声がかかった。

「その船、いづれへ参るぞ」

「この船は、中ノ島より乾魚を積み、出雲国へ参り

まする」

櫓こに立つた弥藤太が、大きな声で答えた。

もしも、対手たての武者が熊手くまでを伸べ、この船の舷へ引っかけようとしたときは、すぐに切り払えるよう、弥藤太は、積荷のうしろに太刀を隠しておいた。

続いて、先頭の小舟の武者が声を張って訊いた。

「その屋根の下に、なにが積んであるぞ」

「いずれも、乾魚ばかりでござります」

と弥藤太は、わざと屋根の入口に置いた乾魚の俵から、中味をつかみ取り、高々と手にかざして見せた。

案外のこと追手の舟は、この船へ乗り移ろうとする様子も見せずに、また同じ武者が大音声だいおんじやうに訊いた。

「ほかに、怪しき船を見なかったか」

「それなれば、最前の船でござりましょう」

「なに、見たか」

「夜明けのころ、西ノ島を出たかと思う船、風のような早さにて南西のかたへ去つてござります。その船に乗っていたは、立島帽子たてえぼうしを着たる人々と、都の上臈じやうろうかと思わるる女人にょにんたちでござりました」

「さては、疑いもなく主上の御船ぞ」

とその武者は、大きな声でほかの舟へ命じた。

「いづれも、西南のかたへ懸命に漕げ。やがて目ざす船に追いつこうぞ」

そのまま十艘の小舟は、それ以上は咎めようとはせず、いっせいに舳先を西南へ向け、海上を漕ぎ去った。

小舟の影が小さくなったところ、屋根の下から名和悪四長泰長が出て来た。

「さすがに弥藤太の船だな。水手、楫取など、いづれもおぬしの下知のままに働く」

「海で働いて参つたそれがしでござる」

と弥藤太は、無愛想に答えた。

その日の夕方、主上を乗せた弥藤太の船は、無事に伯耆国名和湊へ入った。

あらかじめの約束通り、悪四郎泰長が船上で烽火を焚くと、湊のほうから数艘の小舟が漕ぎ出して来た。

先頭の舟に乗っていたのは、名和一族のあるじ又太郎長年と、その弟の小太左衛門尉長重であつた。

「それがしが、六条の朝臣でござる」

と、まず左近衛少将千種忠顕が屋根の下から出て、名和長年へ声をかけた。

「おのおのの忠節によつて、つつがなく主上には隠岐島を逃れ給うた。只今、謁見の儀を取計う」

「おそれ入り奉る」

名和長年たちは、いづれも小舟の上に平伏した。

弥藤太も赤田法師も、船上にひれ伏した。

黒の直衣を召し、烏帽子をつけた後醍醐帝は船上にお姿を見せ、名和一族へ会釈を賜わった。

その夜のうちに、主上は名和家の屋形を仮の行在所と定められた。

すぐに、出雲国の塩谷高貞のところへも早馬の使者が走った。曾つて隠岐国の守護を勤めていた高貞だが、この一年ほどのあいだに、名和長年に説かれ、次第に反北条家の旗色を明らかにするようになっていた。

後醍醐帝の守護として隠岐島へ渡っていた佐々木清高は、やはり同じように天朝方の味方をする、と定めていたので、ここで一時に北条家へ叛旗を翻しては、山陰道の武士たちがいっせいに六波羅勢から攻められることになる。

「この名和家の勢力の及ぶところに、船上山^{せんじょうせん}というのがある」

と、赤円法師が弥藤太へ話した。

「船津というところから二里ほどのところに、のぼりになる。山の上の、また山の上ゆえ、ほかの峰よりも秀れて高い。いまごろは、まだ雪も深からうが、その船上山を天然の砦^{とりで}として、名和長年の一族、それに近在より集めたる侍たちを合せて二千ほどにて、主上を守り奉るのだという。そのあいだに、噂^{うわさ}が国々へ聞え、馳^はせ参^{まゐ}る武者が多くなろう。六波羅^{ろくはら}の討手が押し寄せて参るまでには、官軍の勢力もますます強くなろう、というのが名和一族の計略だ」

「うむ」

そういう戦いなどには関心のない弥藤太は、しばらく考えていたが、

「では、もはやわしの船には用はないわけだな。山の上に船を引きあげたとて、なんの働きもせぬ。恩賞も貰ったれば、わしは再び船子を集め、船に乗って長門国^{ながとくに}へ参り、商いでもしようと思う」

「待て、弥藤太」

と赤円は太い腕をのべ、弥藤太の両肩をつかむと、

「おぬし、主上が隠岐国より逃れさせ給うおん手伝いを致したのに、このまま引退るつもりか。只今の世の中を、なんと見るぞ。これまでたびたび、都にては鎌倉幕府より力を奪い、再び天朝の世に戻そうと戦いを続けられた。一方では、守護職^{しゅごしやく}や地頭^{じとう}が、おのが力にて莊園^{しょうえん}を侵し、それぞれ諸国に武士の力が分れ、鎌倉幕府の勢は次第に衰えている。天皇には、いまの時を逃すではない、とお考えになり、味方を集め給うたこと、そなたも承知をしておろう。河内よりは楠木正成^{くすのきまさむね}が起ち、赤坂城に立籠^{たちこも}って幕府の軍勢と戦い、さんさんに對手を悩ましたること、そなたも承知していよう。天朝^{てんてう}方にとって、いささかの力でもほしいときなのだ。のう、弥藤太」

黙って聞いていた弥藤太は、べつに心を動かされた様子もなく、薄笑いを浮かべながら赤円法師を見た。

「世の中がどうなろうと、おれにはどうでもよいことだ。坊主^{ぼうず}、おぬしは天朝方のためにいのちを捨てて働くがよい。わしは、名和湊から船で去る。帝^{みかど}を